

第19回  
新日鉄音楽賞  
受賞者  
インタビュー

# “4人”の魅力を追求する クアルテット

ゲスト◎弦楽四重奏〈フレッシュアーティスト賞〉

## クアルテット・エクセルシオ

(大友肇氏、西野ゆか氏、山田百子氏、吉田有紀子氏)



大友肇氏 (チェロ)



西野ゆか氏 (第一ヴァイオリン)



山田百子氏 (第二ヴァイオリン)



吉田有紀子氏 (ヴィオラ)

—— 新日鉄音楽賞受賞おめでとうございます。初めに、現在の活動に至るまでの経緯をお聞かせください。

**大友** 大学の室内楽の授業で西野と吉田が組み、そこに私が参加したのが母体になっています。勉強の一環として始め、卒業後はそれぞれソリストとしてやっていくつもりでした。



学生時代、オーストリアでバルトーク弦楽四重奏団のレッスンを受講

**西野** ですが、続けるほどにアンサンブルは楽しくて。先生からラテン語で「常に高きを目指して」という思いを込めた『クアルテット・エクセルシオ』という名前を付けていただき、コンクールにも出るようになりました。

**大友** 卒業後も個々に活動する傍らクアルテットを続けていたのですが、大阪のコンクールで受賞した際、「賞をいただくということは、続ける責任があるので」と思ったのが、本格的な活動を始めのきっかけです。その後、2004年に山田が加わり、今のメンバーになりました。

### プロフィール◎クアルテット・エクセルシオ

1994年桐朋学園在学中に結成。以後、96年の第1回東京室内楽コンクール第1位、第2回大阪国際室内楽コンクール第2位、以降受賞多数。ベートーベン作品を主軸としたレパートリーに、近年は国内外の近現代作品を新たなアプローチで表現。数々の音楽祭に参加する一方、日本では数少ない常設の弦楽四重奏団として年間60公演を行っている。また幼児や学生のためのコンサートや地域コミュニティーコンサートを通じて、広く室内楽の啓発活動にも力を注いでいる。メンバーは、大友肇(チェロ)、西野ゆか(第一ヴァイオリン)、山田百子(第二ヴァイオリン)、吉田有紀子(ヴィオラ)。

# 辛いけれど面白い、 楽団長として走り続けた30年

ゲスト◎東京交響楽団 理事・最高顧問〈特別賞〉

## 金山 茂人氏



疎まれ憎まれ儲からないのに、面白くてやめられない(金山)

——金山さんは楽団長になってヴァイオリンはお辞めになったのですか。

金山 100人もいる団員に給料を支払わなければなりませんから、音楽家というより、中小企業の経営者のようなもので、とてもヴァイオリンは弾けません。毎月毎月、経理から「今月は200万円足りません」などと報告されるたびに、「ああ、大丈夫」と平静を装いながらも、手の甲は恐怖で総毛立っていました。そして毎月25日の振込日に向けて、ひたすらお金の工面に走り回るのです。借金は絶対にしない主義なので、ひたすらいただくだけです(笑)。「文化発展のために貢献を」と強気な姿勢で交渉することを徹底してきました。不思議なことに、「もうだめか」と思ったときには、必ず誰かが手を差し伸べてくれました。ふとしたご縁で出会った方が個人的に助けてくださったり、企業から資金提供をいただいたりして、徐々に人の輪が広がっていきました。私も日本の音楽界のためとってお願ひする以上、信頼を裏切ることではできません。

金山 私は当初ヴァイオリン奏者として東京交響楽団に入団しました。初任給が4万2千円、早稲田の大学院を出た兄の給料が2万5千円の時代で、「オーケストラってなんていいものだろう」と思ったものです。ところが1年もしないうちに、突然、財団法人が解散してしまいました。楽団は自主管理になったのですが、給料の遅配や欠配が続くようになり、12年我慢した後、とうとう若手楽団員たちが「何とかしよう」と立ち上がったのです。このとき、一番声大きいという理由から私が楽団長をすることになってしまいました。36歳のときです。以来、2005年まで30年も務めてきました。

### プロフィール◎かなやま・しげと

1940年富山県生まれ。国立音楽大学器楽科卒業後、1963年に(財)東京交響楽団にヴァイオリン奏者として入団。76年4月、東京交響楽団の実質的な代表となり、以後2005年まで30年にわたり、専務理事・楽団長として団の経営から公演の企画運営と多彩な活動を行い、東京交響楽団の発展に寄与。現在は理事・最高顧問。東京オーケストラ事業協同組合会長、社団法人日本オーケストラ連盟副理事長をはじめ自治体のアドバイザーなども数多く務め、クラシック音楽界の振興に尽力している。2004年度北日本新聞文化功労賞、2006年度『渡邊暁雄音楽基金』特別賞を受賞。



指揮者たちと楽屋にて(左から秋山和慶氏、金山氏、若杉弘氏、飯森範親氏)





2009年、東京都美術館で行われた「東京・春・音楽祭」

また、東京交響楽団としての特色を確立していくことにも腐心しました。国内には、在京オーケストラだけでも数多くあり、音楽に詳しい方でも私たちと東京フィルハーモニーや東京シティ・フィルを間違われる方は少なくありません。そんな激しい競争の中で生き残るためには、レベルの高さを維持することはもちろん、曲目や公演に個性を持たせ、どこよりも早く新しい作品を演奏するなどの工夫をしなくてはならなかったのです。

一方、個性的な団員たちとのぶつかり合いもしばしばありました。彼らもプロですから、簡単に自説を曲げたりしませんしプライドも高い。それを「まあまあ」とまとめてしまうと、楽団そのものが小さくなってしまいます。ベテランであろうと腕が落ちれば辞めてもらい、楽団のレベルを上げる人材を集めなくてはなりませんし、彼らの希望を無視しても、お客様を呼べるプログラムを作らなくてははいけません。怒鳴ってばかりいましたが、彼らは音楽に対してとても純粋で、方向性さえきちんと示せば、素直についてきてくれるのです。

コンサートで演奏する彼らの真剣で一生懸命な表情と、それに応えて拍手してくれるお客様の顔を見るのが一番の喜びです。辛いし、みんなに疎まれ、憎まれ、儲からないのに、面白くてやりがいいがあって、やめられない。気が付けば30年経ってしまったというところです。

### 本音をぶつけ合い作り上げる弦楽四重奏 (クアルテット・エクセルシオ)

——クアルテットについて教えてください。

**大友** ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロで構成されるクアルテットの魅力は、“4人”という絶妙な数にあると思います。オーケストラでは指揮者が一つにまとめますが、クアルテットでは互いが音を通してコンタクトを取り合う楽しさがあります。

**吉田** 当然意見のぶつかり合いはあります。違う人間である以上、感じ方も考え方も異なりますし、本音をぶつけ合わなければ良いものは作れません。変に気を遣うとストレスになりますから、4人が対等であることが必要です。一つの意見が出たら、それに対して他の3人が検討し、試す。納得いかなければまた意見を出し、それを試す。ひたすらその繰り返しです。

**大友** 美しく言うそうですが、夫婦喧嘩のようなものですね。よく吼えますし(笑)。

**西野** 15年一緒にやってきて、本当に本音でぶつかるようになったのはここ6、7年くらいで、やはりそれからの方が良くなったと思います。みんなで作り上げていく過程も楽しいのですが、ソロで演奏するときには自分の内面に向かって深く集中していくのに比べ、4人での演奏に集中すると、耳も頭もすべてのアンテナが外に向かって広がり、大きな火が一気に燃え上がるような高揚感があります。

**金山** 我々オーケストラから見て感じるのは、ベートーベン、ハイドン、モーツァルトなど、歴代の作曲家がみな室内楽を交響曲と同様に重要視し、素晴らしい作品を書いていることですね。

**山田** 特に、ベートーベンは生涯を通じて17曲もの弦楽四重奏曲を書いています。私たちはそれらの演奏を通して、彼の成熟期の前、成熟期、晩年期と三つの大きな歴史を体感できるのです。自分のことに置き換えて、心身ともに悩むことができることに、とても感動します。そのようなことを知ってもらうことも私たちが演奏する理由の一つです。

### クラシック音楽のレベル向上と 普及に、多面的に取り組む

——皆さんはクラシック音楽の普及・向上のためにさまざまな活動をされていますね。

**金山** 多くの方にコンサートに来ていただくには、



2008年、京都市内の保育園でのアウトリーチ活動の様子

テーマや話題づくりも大切です。例えば、自治体主催の芸術フェスティバルなどに来るお客様は年配の方が多く、田園や運命、新世界など、ポピュラーな名曲を好みます。一方、定期演奏会などでは、積極的に現代作品にチャレンジしていかなくては、ファンに飽きられますし、オーケストラの成長ありません。かといって両方を合わせると、中途半端でどちらのお客様も来なくなりますから、テーマを決めることは大切なのです。また、指揮者陣のレベルアップも重要です。

そこで近年、そうしたことを議論する集まりとして、社団法人日本オーケストラ連盟を発足させました。現在は全国24団体の会員と6団体の準会員が入っています。運営スタイルも置かれている状況も違うので、最初は意見が合わず大変でしたが、皆、オーケストラ全体のレベルを上げるにはどうすれば良いかということ真剣に考えています。

**山田** 私たちは8年ほど前から、「アウトリーチ」という活動を続けています。クラシックに馴染みを持ってもらうために、地域の公民館や学校、老人施設などで短い演奏をしたり、楽器や曲を説明して、楽器にさわってもらったりなど、いろいろなことをします。

**西野** 最初は富山の小さな町のホールのお誘いがきっかけでした。その町に5日間くらい滞在してあちこちの公民館に行き、住民の方にはゴザの上に座って聴いてもらい、最後に皆さんをホールに呼んで、コンサートを体験してもらうというものです。活動を始めて5年経った年、席に座っていたおばちゃんが舞台に向かって手を振ってくださったとき、「あ、壁が取れた」と感動しました。聴いている方のリアクションがあって初めて、すごい活動なんだと実感できたのですが、直接触れ合い、長く続けることが大事なのだと思います。

——新日鉄文化財団を通じて紀尾井ホールを運営する新日鉄に対して一言お願いします。

**金山** 企業の方にはいつも、「文化振興のために行動を」とお願いするのですが、新日鉄はこのような賞を設け



1991年10月、国連総会で行われた「国連デーコンサート」指揮：秋山和慶 演奏：東京交響楽団

られたり、紀尾井ホールを作られたり、とても頑張っているんじゃないかと思います。オーケストラにとっては、練習と同じホールで本番を行うのが理想で、東京交響楽団も5年前に川崎市のホールとフランチャイズ契約になってから、演奏力が非常に向上しました。良い演奏には、企業や国などの援助が不可欠です。

——今後の目標を教えてください。

**大友** 継続することが目標です。日本には常設のクアルテットは多くありません。一流ソリストがその都度組むのも素晴らしいのですが、アマチュアでも私たちのようなプロでも長く一緒に演奏していくと、継続しているからこそその力があります。

**吉田** 今回の受賞も15年継続してきたことへの評価だと思っています。続けることで自分たちを高め、周りのものが後からついてくるくらいにしていければと思います。

**西野** もっと常設のクアルテットが増えて、それぞれの個性を尊重しながら、ライバルとして互いを高め合えるようになったら楽しいと思います。クアルテットだけで生活するのは難しいけれど、「エクセルシオが続けられているから僕達もできるかも」というきっかけになりたいです。

**山田** クアルテットの“4”の魅力を追及し続けたいです。ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの“3”=トリオの方が安定しているのに、あえてもう1本ヴァイオリンを加えてバランスを崩したのは何故か、何故その方が面白く聴こえるのか、意味があるはずですよ。

**金山** オーケストラは、とにかく良い演奏をしたと自己満足で終わりがちですが、良い演奏かどうかはお客様の反応が一番正直です。それを忘れてはいけません。現在クラシック・ファンは国民100人に1人か2人と言われますが、それが10人に1人となるよう、これからも活動していきたいと思っています。



2006年5月、東京交響楽団創立60周年記念北京公演の晩餐会にて、唐家璇國務委員(左)、栗原小巻氏(右)と。中央が金山氏